京都御所の誕生

平安時代に京都に都が遷されたとき、御所は現在よりも2キロ西に位置していました。その後、火事によって御所は何度も移動を余儀なくされ、貴族の住居も移転を繰り返しました。現在の京都御所がある場所に初めて住んだ天皇は光厳天皇で、1331年に東洞院土御門を仮住まいとしました。1392年の南北朝統一後はここが正式な御所となります。

中世以来、源頼朝などの強力な権力者たちが頻繁に御所の改築を行ってきました。桃山時代、豊臣秀吉は御所のすぐ近くに、皇族やその他の貴族の住居を集結させた地区を作ることを計画します。この流れは江戸時代にも引き継がれました。計画は1600年代の初めにはほぼ完成し、その後は、拡張はしても、基本的な構造に大きな変化はありませんでした。

の

〜 994年 の内覧以前

 995 〜 1027年道長のまで

1028 〜 1074年藤原の死亡まで

1075 〜 1101年藤原の死亡まで

 1102 〜 1162年藤原の死亡まで

  時代前期の

   時代中期の

 時代後期の

京都の

公家

江戸時代における内裏の移り変わり

江戸時代初期、この地域には町屋（庶民の家々）がありましたが、しかし次第に公家の邸宅がそれらにとってかわり、江戸時代後期には140以上の公家屋敷が立ち並ぶようになりました。

御所や宮家の位置も少しずつ変わりました。

３つの江戸期の京都御苑の古地図が、内裏と公家町の変遷を示しています。

京都御苑（黄緑）は旧平安京の北東の端にあります。マップ内の、他の色が塗られているエリアは時代によって異なる里内裏の位置を示しています。